

上越市（高田）における雪国雁木の利用・保存状況に関する研究

Keywords

雁木 雁木通り 町家 維持保全 リノベーション

DZ18006 老野生 真大



1. 研究背景

雪国特有の街並みである雁木は、古くは江戸時代から冬季の快適な歩行空間を支えてきた。日本有数の豪雪地帯である新潟県上越市高田には全長約16kmの雁木が残っている。しかし、降雪量の減少や車社会の普及、老朽化等に伴い、雁木が撤去されることも少なくない。一方、都市のコンパクト化が重視される昨今、雁木は徒歩での生活圏を支える存在として、文化・歴史的だけでなく都市施設としても価値が高いと言える。

菅原（2011）、黒野ほか（2015）など、これまで高田を含めて新潟県内の雁木を対象とした様々な調査・研究が行われてきており、同時に雁木を活かしたまちづくりの手法等も多く検討されてきた。しかし、2015年の北陸新幹線開業をきっかけに上越市や高田を取り囲む環境は大きく変化している。これらの状況の変化を踏まえ、高田の雁木の保存・利用状況と周囲環境・状況を総括的に調査・分析することは、雁木を維持保全していくうえで十分に価値があると考ええる。

2. 研究目的

本研究では、新潟県上越市高田における雪国雁木の利用・保存状態（有動的情報と静定的情報）を調査・分析し、雁木の現状を整理するとともに、今後の維持保全において重要となる要素を考察する。

3. 研究方法と対象地域

3.1 雁木及び町家空間の残存状況の調査

まず、雁木が多く残存しているエリアにおいて、雁木の残存状況、利用用途、雁木に付随する町家の構造（木

造、鉄骨造、コンクリート造等）の情報を収集し、地図として可視化する。

3.2 雁木の利用状況に関する調査

次に、雁木・町家空間の利用状況（人の往来等）を調査する。調査は、季節、曜日、時間、天候等の周辺環境を変えて行う。具体的には、定めた調査範囲（2～3丁の範囲）について、約2～3時間の間において、雁木を往来する人の数、性別、年代、行為等の情報を収集し、これをグラフ・地図化する。

3.3 地図の比較による分析

3.1、3.2の結果を踏まえ、人々の滞留行為と雁木の残存状況の関連性について分析を行い、現代における雁木の有用性を考察する。

3.4 対象地域について

上越市は、新潟県の南西部に位置し、古くは交通の要として栄えた。江戸時代初期から城下町として街が計画的に整備され、路は格子状に整えられると共に、各町家には雁木がかけられた。

市内には高田以外に直江津・稲田等の複数の雁木通りが存在するが、中でも高田は高田城の城下町として最も街路の整備が行き届いていたことから、日本最長の雁木通りが形成されている。

また、複数の通りにおいて雁木通りが形成されていることから、高田では通りごとの特性や人の営みが多く見られると考え、本研究では高田の雁木について研究を行う。特に、高田駅を中心として、雁木通りが並行して南北に続く仲町・本町・大町の3町の通りをメインに残存状況及び利用状況を調査する（図1）。

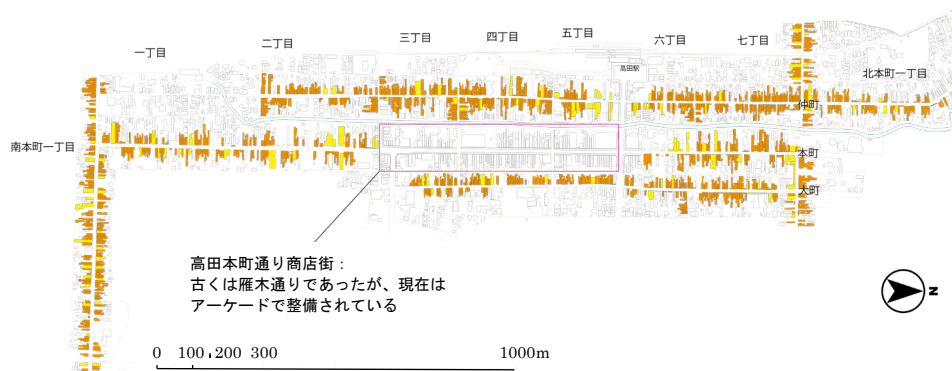


図1 調査対象地域と雁木の残存状況（2021年）

4. 雁木の残存状況に関する調査結果

4.1 雁木の残存状況と町家の構造の傾向

対象エリア全体の雁木の残存状況を図1に示す。駅北側（仲町、本町、大町の6丁目、7丁目）では並行する複数の通りにおいて雁木通りが形成されていることがわかる。一方駅南側では、本町1・2丁目及び北本町の長距離に渡って雁木が残存していることが見て取れる。また、駅北側では従来型の木造町家が多いのに対し、駅南側では鉄骨造、コンクリート造による建物が混在していることもわかった。

4.2 リノベーションが進む雁木・町家

仲町、本町、大町3町の雁木残存状況を調査した結果、黒野ほか（2015）が調査した2015年以降にリノベーション・コンバージョン等により新たにできた雁木・町家が存在することがわかった。図2に2015年以降にリノベーション・コンバージョンされた雁木・町家の分布を示す。雁木が多く残存し、東西南北に雁木通りが形成されているかつ伝統的な木造町家が残るエリアにおいてリノベーション・コンバージョン等が多く見られた。従来型の木造町家は、建物の老朽化などを理由に空き家となっており、リノベーションやコンバージョンによって改修を行える物件が多く存在することが推測できる。また、駅南側において雁木が多く残存している北本町と比べ、駅からのアクセスが比較的容易であることも多くのプロジェクトが進行する要因の一つだと考えられる。

リノベーションやコンバージョンされたこれらの建物の用途は、カフェ、バーなどの飲食店、民泊・休憩所、企業のサテライトオフィスなど様々である。そして、従来の高田地区の賑わいの中心であった駅南側ではなく、北側にその多くは存在している。これらの経営者にインタビュー調査を行ったところ、以前から上越市に住んでいる人に限らず、U・J・Iターンにより、他地域から移住し雁木町家を活用している人がいることがわかった。北陸新幹線の開通により首都圏とのアクセスが向上し、

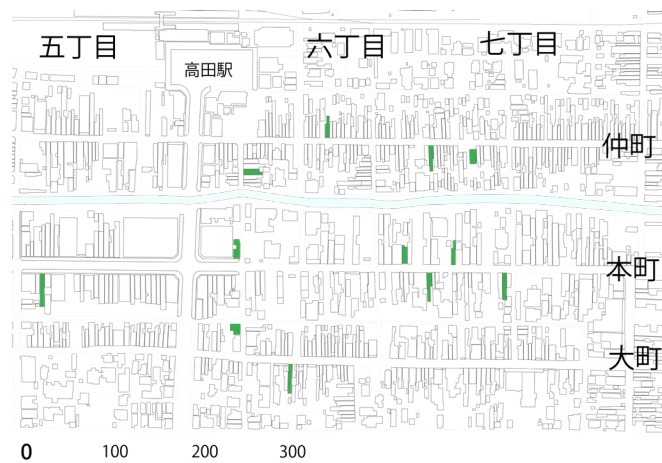


図2：リノベーションされた雁木・町家

高田への移住を検討する人が少なからず増加したものと推測できる。

5. 雁木の利用状況（人流）に関する調査結果

先述のように近年まちづくりなどが活発化している高田駅北側は、住宅と商店が混在するエリアであり、多様な利用方法が見られると考え、9月下旬と12月下旬にこれらの通りを中心に人流の調査を実施した（表1、表2）。

9月下旬の調査では、住民同士の交流や植栽の手入れ、観光客の来訪等、様々な行為が見られた。調査以前、雁

表 1：秋季の人流調査の記録の一部

場所	日付	曜日	天候	気温	
大町4丁目 ～6丁目	9月29日	水	晴れ	24℃	
時刻	種別	人数	性別	年齢	行為
16:00	住民	1	女性	50	歩行
	住民	2	男女	40	歩行
	観光	2	男女	60	街歩き
	住民	2	男女	70	商売
	観光	3	女性	50	街歩き
17:00	住民	3	女性	60	会話 (カフェ前)
	住民	5	男女	30～40、 10～	会話
	通勤	1	女性	40	歩行
	住民	4	男女	30～40、 10～	会話
	通学	3	男	10～	会話、歩行
	住民	1	女	70	歩行
	通学	1	男	10～	歩行

表 2：冬季の人流調査の記録の一部

場所	日付	曜日	天候	気温	
大町4丁目 ～6丁目	12月28日	火	晴れ	3℃	
時刻	種別	人数	性別	年齢	行為
16:00	住民	1	男性	60	歩行
	通学	1	男性	10～	歩行
	住民	2	女性	50	歩行
	通勤	1	男性	40	歩行
17:00	通勤	1	女性	40	歩行
	住民	2	男女	60～70	会話
	住民	1	男性	70	歩行
	通学	2	男性	10～	歩行・会話
	通勤	1	男	40	歩行

木での人々の行為は買い物、通勤・通学など目的を持った行動（＝歩行空間としての雁木）が多いと考えていたが、調査の結果、駅北側では滞留行為も多く行われていた。多様な人々が雁木を利用することから、雁木下の空間がコミュニケーションの場となりやすいと考えられる。

一方、12月下旬は、9月下旬に比べて気温が低く、降雪も見られた。その結果、雁木を歩行する人は一定数おり、降雪時でも歩行空間を確保するという雁木元来の機能は現代でも損なわれていないことが確認できた（図3）。しかし、歩行者が意図的に雁木のある通りを選択しているか否かは不明である。また、雁木下における住民同士の交流や商業行為は9月下旬と比べて少なく、冬季においてはコミュニケーションの場としてはあまり機能しているとは言えない結果となった。



図3 雁木を歩行する地域住民（降雪時）

6. 雁木の残存状況と利用状況の関係

これまでの調査を踏まえ、雁木の残存状況と利用状況の関係について分析を行った。図4は、駅北部の雁木の残存状況と平日3日分の15:00～17:00における人流データを合計したグラフを重ね合わせたものである。

図4より、3つの通りにおいていずれも降雪が確認できた冬季よりも秋季の方が人の往来が多いことがわかる。また、往来の数は季節に関わらず南側（駅側）の方が多く、雁木が人の往来を増やしているとは言えない結果となった。

そこで、滞留行為では雁木の残存状況と関係性があると仮定し、収集した人流調査の内、滞留行為（会話、商業行為等）のデータのみを抽出したグラフを残存状況に重ねた（図5）。

図5より、図4の人の往来とは異なる分布をしていることがわかる。秋季、冬季で違いはあるが、仲町、大町においては駅からの近さにかかわらず、雁木が集中している場所で滞留行為が比較的多く発生していることがわかった。この結果から、雁木の存在が街路における滞留行為の要因の一つとなっていることが示唆された。

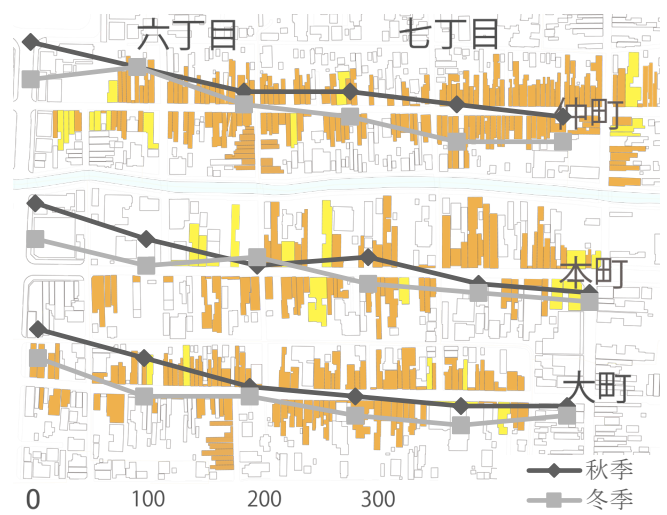


図4 雁木の残存状況と人流の関係

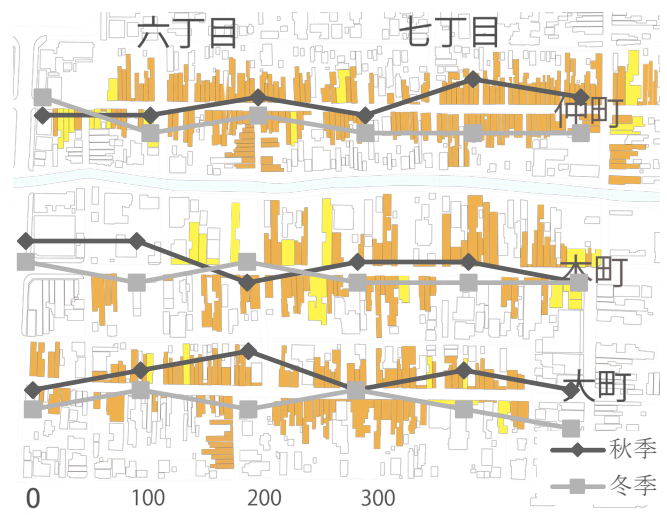


図5 雁木の残存状況と対流行為の関係

7. 考察

雁木の残存状況調査では、雁木、木造町家が多く残存するエリアが地図によって可視化された。そして、現在リノベーションやコンバージョンが多く行われているエリアは、それらのエリアと重なることが確認できた。しかしながら、現在高田で行われている雁木・町家の再生利用は基本的に個人の事業主によって行われている。そのため、空き家となった町家がすべて図2で示した事例のように活用されることは考えにくく、取り壊しとなる可能性は十分に考えられる。そのため、雁木が多く残存し、少しずつ新たな賑わいが生まれつつある駅北側の地域において、行政が積極的に事業主や企業を誘致することで、取り壊しの可能性のある雁木を残すことを検討する必要がある。このエリアを中心として雁木を生かしたまちづくりの流れが上越市内のその他の雁木残存地域に派生していくことは十分に考えられることから、民間による

様々な事業が行われている仲町・本町・大町の5、6丁目のエリアの賑わいを加速させることは、高田や上越市の雁木全体の維持保全の糸口になると考えられる。

雁木の利用状況の調査では、車社会が発展した現代でも雁木が降雪時の歩行空間としてその機能を持ち合わせていること、地域住民同士や時には観光客と住民との交流の場となっていることが確認できた。単なる歩行空間ではなく、玄関先であり、店先でもあるという特殊な空間だからこそ多様な営みが確認できたと考える。間口が狭く、近隣住民との距離が近い高田の町家の特性上、雁木下の空間は自然と会話などの機会を生み出していると考えられる。地域住民同士の交流が活発化することは、地域全体の賑わいに直結する重要な要素の一つであり、単に雁木を保存するのではなく、通りとして雁木を維持保全していくことが重要だと考える。

また、雁木を単なる歩行空間ではなく、歩行者が経路を考える際に意図的に雁木のある通りを選択したくなるような付加価値を与えることも重要だと考える。高田の雁木は公共地ではなく、あくまで私有地を地域に開放する形で成り立っているため、行政によって強制的に改修等を行うことは難しい。逆に言えば、住民や所有者の協力があれば大きな制約を受けることなく様々なプロジェクトを行うことが可能なのである。車社会となっている現代では、本来の歩行機能に限らず時代に即した付加価値を与えることもまた、雁木の維持保全の重要な糸口になるだろう。

8. 結論

本研究では、新潟県上越市高田における雪国雁木の利用・保存状態を調査・分析し、雁木の現状を整理するとともに、今後の維持保全において重要となる要素を考察した。

その結果、駅北側（仲町、本町、大町の6丁目、7丁目）では並行する複数の通りにおいて雁木通りが形成されている一方で、駅南側では、本町1・2丁目及び南本町の長距離に渡って雁木が残存していることが確認された。また、駅北側では従来型の木造町家が多いのに対し、駅南側では鉄骨造、コンクリート造による建物が混在していることもわかった。さらに駅北部では、2015年の北陸新幹線の開通以降、雁木とそれにつながる町屋のリノベーションやコンバージョンが進み、カフェ、バーなどの飲食店、民泊・休憩所、企業のサテライトオフィスなどとして使われていた。これらは、以前から上越市に住んでいる人に限らず、U・J・Iターンの人々が経営していた。

雁木の利用状況の調査では、車社会が発展した現代でも雁木が降雪時の歩行空間としてその機能を持ち合わせていること、地域住民同士や時には観光客と住民との交

流の場となっていることが確認できた。雁木下の空間では、住民同士や観光客との会話、商業行為などの滞留行為が行われており、雁木の残存状況との関連性がうかがえた。

今後の課題としては、町家の利用用途等の情報を用いた比較分析が挙げられる。飲食店、オフィス、住宅など町家の利用用途と雁木の残存状況、滞留行為の分布を比較することで、エリアごとのより具体的な特徴を明らかにできると思われる。人流の調査に関しては、より広範囲かつ多様な時間における調査が課題である。本研究では、主に昼間時間帯において継続して調査を実施した。

一方で、駅南側（仲町3丁目～5丁目）には飲食店が多数存在し、飲み屋街となっていることから昼間と夜間では人の往来には変化が見られる。雁木との関連性という点を重視するため本研究では行わなかったが、駅北側とは異なる賑わいを見せるエリアであるため、調査により新たな特性を明らかにできると考える。

参考文献

- 1) 菅原邦夫：日本における雁木通りの残存状態について、日本建築学会北陸支部研究報告集、第52号、pp.465-468、2011
- 2) 黒野弘晴・千葉巧也・高橋人志：上越市高田における雁木整備支援制度と住民意向の反映、日本建築学会技術報告集21(48)、pp.731-734、2015
- 3) 久保田一世・黒野弘晴：屋敷と町の利用と空間構成に支えられる雁木通りの公共性、日本建築学会北陸支部研究報告集、第45号、pp.299-302、2002
- 4) 櫻田和子・相葉康郎：青森県木造町のかみせの利用実態とそのあり方―北国における連続歩行空間に関する研究―、日本建築学会大会学術講演梗概集F-1(九州)、pp.475-476、1998
- 5) 石山慧・樋口秀・中山文平・松川寿也：新潟県長岡地域の雁木通りに関する研究―詳細実態調査と所有者・住民以降調査に基づく今後の維持保全方策の検討―、日本都市計画学会都市計画論文集、Vol.51、No.3、pp.1001-1007、2016
- 6) 一般社団法人 新潟県建築士会：町家の活用促進に関する調査報告書（町家の改修編）、2019
- 7) 野口明子：「雁木・町家」の利用価値低下の要因の明確化と新たな改修方法の開発、慶應義塾大学 政策・メディア研究科、2012